

ヨモギと神様の尻もち

ヨモギはアイヌ語ではノヤといっています。ヨモギにも多々種類があり、地域によっても名前が異なっていて、ノヤはヨ



佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モンレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。全国通訳案内士。

海岸を作っていました。神様とはいえ、重労働のためお腹が空いてきました。しかし、できたばかりの森の植物はまだ幼く

モギ類の総称です。ヨモギはこの世界ができる前は天上界に住んでいましたが、人間の役にたきたいと自ら希望し、至上神にお願いして地上に派遣してもらいました。それで、モシリカカムイという巨人の神様により大地が作られたとき一番先に萌芽したそうです。人間の役に立ちたいと考えて人間界に來ただけあって、ヨモギは大変多くの使い道があり、願いどおり大変役立っています。薬用としては消毒、血止めやお灸、咳止めなど風邪の治療にも使われますし、干したヨモギは非常用の保存食ともなりました。また、強い香りを放つその魔よけのパワーは強力です。新築の家の落成の儀式では、ヨモギの茎で矢を作って家の四隅に矢を射ます。また、病人の病魔払いには、ヨモギの束でフッサ、フッサといいながら病人を打ち、魔性の払いにも当人の体を打ち叩くということを行います。さらに病気が重篤の場合には、二束のヨモギからイモシカムイ(imu-相手と同じことをいったりすること us-いつもする kamuy-神様) または手作りであることから、テケカカムイ(tek-その手 e-で kar-作った kamuy-神様) と呼ばれる人形を作り、その人形に病気を移して、病気が治ったら解体して送ることもありました。日本にも各地に同様の風習が残っています。イモシカムイは病人の枕元や家の戸口に掛けたり、大型のものを作って村の魔よけともされたそうです。

創造神モシリカカムイとヨモギに関わる面白い伝説があります。モシリカカムイは6本の鉤を持って地上に降り立ち、混とんとした土地をかき寄せて山や

て食べられません。そのとき神様は海にクジラを見つけました。そこでクジラをむんずと捕まえて食べることにしました。そのとき世界に一番先にやってきて生えていたヨモギの茎をクジラの口から差し込み、干し草を集めて火をおこし焼いて食することにしました。神様は火のそばでクジラの串焼きが焼きあがるのを待っているうちに、疲れがでて居眠りを始めました。ところが、クジラに火がとおり始め、油がしたたるとその油でヨモギの串に火が着き、クジラは地面に落ちてしまいました。その轟音に驚いた神様は後ろにのぞって尻もちをつきました。その跡が道内あちこちに存在するオシヨロコツ(osyor-お尻 臀部 kot-跡) という地名として残ったということです。有名なのは小樽の忍路です。厚田の押琴も同様ですし、白老付近の海岸にも松浦武四郎の残した史料(東西蝦夷山川地理取調図)にオシヨロコツという地名が記録されているとのことです。また、イマニツ(i-それ ma-焼く nit-串) という地名もこの伝説に関係があります。分解訳からもわかるように、イマニツはクジラを焼いた串のことです。不思議なことに、この二つがセットになっていることが多いのです。この地名が付いている場所は高い岩があるところで、代表的なものはアイヌ民族の聖地ともいわれる三石町(現新ひだか町)の蓬萊山です。地元では焼串岩とも呼ばれている観光名所です。近くに尻餅沢という沢もあり、同様の伝説が伝えられています。

*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査(北海道教育委員会)に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『アイヌのごはん』(監修、デーリマン社、2019年)、『平成20~令和4年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~14』(北海道教育委員会、2008~2023年)等。